

## ピアサポート研修の効果測定に関する研究

○執筆者： 一木 崇弘（熊本大学大学院生命科学研究部 神経精神医学講座）

研究分担者 山口 創生（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部）  
研究協力者 一木 崇弘（熊本大学大学院生命科学研究部 神経精神医学講座）  
三宅 美智（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 公共精神健康医療研究部）

### 要旨

本研究は、障害者ピアサポート研修における講師・ファシリテーターの実践経験と課題を明らかにし、今後の研修体制および人材育成の改善に資する知見を得ることを目的とした。全国の障害者ピアサポート研修に關与する講師・ファシリテーターを対象にオンラインアンケート調査を実施し、研修運営上の工夫、合理的配慮、演習運営における困難等について把握した。その結果、受講者同士が安心して参加できる環境づくりや相互理解を促進する支援が重視されていた一方で、障害特性への対応や理解度の差への配慮、人材不足などの課題が示された。今後は、講師・ファシリテーターの継続的育成と、障害横断的な研修運営体制の整備が求められる。

難については十分に検討されていない。

### A. 研究の背景と目的

近年、障害福祉分野においては、当事者主体やリカバリー志向に基づく支援の重要性が重視されており、障害や疾病の経験をもつ当事者が、その経験を活かしながら他の当事者を支援する「ピアサポート」の実践が広がりを見せている。障害福祉サービス事業所等におけるピアサポーターの雇用や活用は、地域生活支援や社会参加支援を推進する上で重要な取り組みとして位置づけられている。

障害者ピアサポーターの養成に関しては、厚生労働科学研究「障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に関する研究」（平成28年度～30年度）において、基礎研修・専門研修・フォローアップ研修のカリキュラムが構築された（岩崎ら，2017；岩崎，2019）。さらに、令和2年度には障害者ピアサポート研修事業が地域生活支援事業に位置づけられ、令和3年度の障害福祉サービス等報酬改定によってピアサポート体制加算および実施加算が認められたことにより、多くの自治体で研修の実施が進められている。

こうした制度的背景を受けて、本研究班では、障害者ピアサポート研修事業のより効果的な運用方法を提案することを目指している。これまで、自治体を対象とした調査により、研修運営体制や合理的配慮、当事者参画等に関する現状と課題が示されてきた（岩崎ら，2024）。一方で、実際に研修運営を担う講師・ファシリテーターの経験や工夫、困

そこで、本分担班では、全国の障害者ピアサポート研修に關与する講師・ファシリテーターを対象にオンラインアンケート調査を実施し、研修運営において重視している点、合理的配慮の実施状況、演習運営における工夫や課題等を明らかにし、今後の研修体制および人材育成の改善に資する知見を得ることを目的とした。

### B. 方法

#### 1) 基本デザインと対象者

本研究は横断調査であり、全国の障害者ピアサポート研修において講師・ファシリテーターを担っている者を対象としたオンラインアンケート調査であった。対象者には、都道府県および政令指定都市の障害者ピアサポート研修事業担当部署を通じて調査協力を依頼した。各自治体に対して、研修講師・ファシリテーター向けアンケートフォームのURLおよびQRコードを送付し、関係者への周知を依頼した。調査はWebフォームを用いて実施した。

#### 2) 調査項目

アンケートの調査項目は、研究代表者・分担者により原案を作成し、その後、ピアサポーター、支援者、自治体関係者等で構成される会議体において議論を重ねながら修正を行った。最終的な調査項

目には、回答者属性、担当科目、研修運営において重視している点、合理的配慮の実施状況、演習運営における工夫や困難、障害横断的な支援に関する課題、人材育成に関する意見等を含めた。

### 3) 統計解析

回収されたアンケート回答については、記述統計を中心に集計を行った。また、自由記述については内容ごとに整理・分類を行い、代表的な意見を抽出した上で、講師・ファシリテーターが認識している課題や工夫の傾向を検討した。

### 4) 倫理的配慮

本研究は、早稲田大学倫理審査委員会の承認（承認番号：2019-224）を得て実施した。調査対象者には調査目的、回答の任意性、個人情報の取り扱いについて文書で説明し、同意を得た上で回答を依頼した。

## C. 結果

本研究では、全国の障害者ピアサポート研修において講師またはファシリテーターを担う者を対象に、オンラインアンケート調査を実施した。回答数は設問により異なった。障害等領域については複数回答で尋ねたところ、精神障害領域が 89 件（42.0%）と最も多く、次いで障害等領域「なし」が 43 件（20.3%）、身体障害領域が 30 件（14.2%）であった。その他の回答も 20 件（9.4%）みられ、回答者には多様な背景をもつ者が含まれていた（図 1）。また、講師・ファシリテーターとして関与した自治体数については、「1 自治体」が最も多かった一方で、複数自治体に関与している回答者もみられた。

### 1) 基盤的環境整備と合理的配慮

講師・ファシリテーターの立場からみて重要と考える基盤的環境整備については、「適切な会場確保」が 124 件と最も多く、次いで「必要な配慮についての事前の確認」が 119 件、「十分な休憩時間の確保」が 73 件、「開催時期の調整」が 63 件であった。研修の円滑な実施には、講義内容そのものだけでなく、会場、移動、休憩、事前確認等の参加環境の整備が重視されていた（図 2）。

合理的配慮については、「研修実施中の理解度の確認」が 105 件と最も多く、次いで「会場内案内の掲示」が 98 件、「合理的配慮に関する事後アンケート」が 91 件、「途中退場者へのフォロー」が 83 件

であった（図 3）。会場および部屋の確保に関する課題については、有効回答 176 件のうち、「はい」が 49 件（27.8%）、「いいえ」が 43 件（24.4%）、「わからない／関与していない」が 84 件（47.7%）であった。自由記述では、バリアフリー環境、交通利便性、多目的トイレ、グループワークに必要な広さ、複数会場の確保、音響環境、他グループとの距離等が課題として挙げられていた。

### 2) 演習を円滑に進めるための工夫

演習を円滑に進めるために行った工夫としては、「ひとつのグループに複数名のファシリテーターの配置」が 52 件（30.4%）と最も多く、次いで「ホワイトボード、どこでもシート、ポストイットなどの文具の使用」が 44 件（25.7%）、「ファシリテーター向けの事前研修の開催」が 26 件（15.2%）であった。一方で、「ファシリテーター用の台本」は 6 件（3.5%）、「ヒント集・ポイント集」は 11 件（6.4%）にとどまった（図 4）。

自由記述では、参加者全員が発言しやすい雰囲気づくり、事前打合せ、複数ファシリテーター配置、当事者と専門職のペアによる進行、文具を活用した意見表出の支援などが挙げられた。特に、理解度や発言のしやすさに差がある参加者を含むグループワークでは、ファシリテーターの進行力や事前準備の重要性が示された。

### 3) 基礎研修に関する評価

基礎研修で最も重視した点については、「受講者同士が支え合う雰囲気」が 102 件（61.4%）で最も多く、「どのような障害の人であっても理解しやすい講義・演習」が 45 件（27.1%）で続いた（図 5）。講義・演習時間の適切性については、有効回答 164 件のうち「適切だった」が 121 件（73.8%）であった一方、「長すぎた」が 22 件（13.4%）、「短すぎた」が 21 件（12.8%）であった。

基礎研修に関する自由記述では、ピアサポートを体感できる機会として肯定的に評価されていた一方、ピアサポートの概念、障害福祉分野に関する制度・施策、歴史、専門用語等の理解が難しいとの意見もみられた。また、知的障害、高次脳機能障害、視覚障害、聴覚障害、難病等、多様な障害特性をふまえた説明方法、資料作成、時間配分の工夫が必要であるとの指摘がみられた。

### 4) 専門研修に関する評価

専門研修で最も重視した点については、「受講者

同士が支え合う雰囲気」が66件(52.0%)で最も多く、「どのような障害の人であっても理解しやすい講義・演習」が30件(23.6%)で続いていた(図6)。講義・演習時間の適切性については、有効回答123件のうち「適切だった」が91件(74.0%)であった一方、「長すぎた」「短すぎた」はともに16件(13.0%)であった。

専門研修に関する自由記述では、内容が濃く、基礎研修と比べて理解や進行の負荷が大きいという意見がみられた。また、基礎研修との内容重複、講義と演習のつながり、リカバリストーリーやバウンダリーの扱いなどが論点として挙げられた。

さらに、専門研修では、一部科目においてピアサポーターと事業所職員が分かれて受講する形式が採用されていることについて、その意義や課題に関する意見もみられた。分離受講については、「本音を話しやすい」「立場ごとの課題を共有しやすい」といった利点が示される一方で、双方の学びを共有する機会の不足や、受講者を区分して実施することの意義について検討を求める意見もみられた。

### 5) フォローアップ研修に関する評価

フォローアップ研修に講師またはファシリテーターとして参加した経験については、有効回答129件のうち「参加したことがある」が62件(48.1%)、「参加したことがない」が67件(51.9%)であった。参加経験のある科目は、「障害特性」および「働くことの意義」が各46件、「障害者雇用」および関連演習が43~45件、「ピアサポーターとしての継続的な就労」が44件であった(図7)。

自由記述では、フォローアップ研修は、基礎研修・専門研修を終えた後に実践を振り返る場として有効であるとの意見がみられた。一方で、加算算定上、受講が必須ではないため参加者が少ないこと、実際にピアサポーターとして雇用・活動した後に受講することで学びが深まること、基礎・専門研修と同一年度内に実施する場合には受講者や事業所の負担が大きいことが課題として示された。

### 6) フィードバック・振り返り

研修参加者や自治体等の企画・運営側からフィードバックを受ける機会については、有効回答128件のうち「はい」が77件(60.2%)、「いいえ」が28件(21.9%)、「わからない」が23件(18.0%)であった。フィードバックの方法としては、オンラインを含むアンケートが62件と最も多く、インタビューが10件、その他が24件であった(図8)。

自由記述では、研修後の反省会、実行委員会での振り返り、自治体担当者との共有、受講者アンケート結果の共有などが挙げられた。フィードバックは、次年度研修に向けた改善点の把握や、講師・ファシリテーター間の共通理解形成に活用されていた。一方で、講師・ファシリテーターへのフィードバックが十分に共有されていない場合や、毎年度同様の運営になりやすいことへの課題も示された。

## D. 考察

講師・ファシリテーターは、障害者ピアサポート研修において、単に講義や演習を進行するだけでなく、受講者同士が安心して支え合える場づくり、障害特性に応じた理解促進、グループワークの調整、合理的配慮の実装に関わる重要な役割を担っていることが示された。特に、基礎研修・専門研修のいずれにおいても「受講者同士が支え合う雰囲気」が重視されており、ピアサポート研修の質は、カリキュラム内容だけでなく、場の安全性や関係性を支えるファシリテーションに大きく依存していると考えられた。一方で、研修内容の難しさ、専門用語や制度説明の理解、障害横断的な参加に伴う配慮、会場確保、時間配分、ファシリテーター育成など、多面的な課題も明らかとなった。その結果、講師・ファシリテーターは、単に講義や演習を担当するだけでなく、受講者同士が安心して支え合える場づくり、障害特性に応じた理解促進、グループワークの調整、合理的配慮の実装に関わる重要な役割を担っていることが明らかとなった。

基盤的環境整備については、適切な会場確保、必要な配慮の事前確認、十分な休憩時間の確保、開催時期の調整などが重視されていた。これらは、研修内容そのものに加えて、受講者が安心して参加できる環境を整えることが研修の質に直結することを示している。合理的配慮についても、研修実施中の理解度確認、会場内案内の掲示、合理的配慮に関する事後アンケート、途中退場者へのフォローなどが重要視されており、研修前・研修中・研修後を通じた継続的な支援体制の必要性が示唆された。

演習運営に関しては、複数名のファシリテーター配置や文具の活用、事前研修などの工夫が行われていた。一方で、ファシリテーター用の台本やヒント集の活用は限定的であり、演習進行が個々の経験や力量に依存している可能性がある。障害者ピアサポート研修では、受講者の障害特性、理解度、発言のしやすさ、自己開示への抵抗感などが多様であるため、ファシリテーターには、場の安全性を

保ちながら対話を促進する高度な調整能力が求められる。

基礎研修では、「受講者同士が支え合う雰囲気」が最も重視されていた。この結果は、基礎研修が単なる知識伝達の間ではなく、ピアサポートの価値を体感し、受講者同士の相互理解を促進する場として機能していることを示している。一方で、ピアサポートの概念、障害福祉サービスや関連制度、歴史、専門用語等の理解が難しいという意見もみられた。特に、知的障害、高次脳機能障害、視覚障害、聴覚障害、難病等、多様な障害特性をふまえた資料作成や説明方法の工夫が求められる。

専門研修においても、「受講者同士が支え合う雰囲気」が最も重視されていたが、自由記述では、基礎研修と比較して内容が濃く、理解や進行の負荷が大きいという意見がみられた。基礎研修との内容重複、講義と演習のつながり、リカバリーストーリーやバウンダリーの扱いなどが課題として挙げられていた。さらに、専門研修では、一部科目においてピアサポーターと事業所職員が分かれて受講する形式が採用されていることについて、その意義や課題に関する意見もみられた。分離受講については、「本音を話しやすい」「立場ごとの課題を共有しやすい」といった利点が示される一方で、双方の学びを共有する機会の不足も指摘されていた。今後は、分離受講と合同受講の意義を整理し、各科目の目的に応じた研修設計を検討する必要がある。

フォローアップ研修については、参加経験のある講師・ファシリテーターは約半数にとどまった。自由記述では、フォローアップ研修は実践を振り返る場として有効である一方、基礎研修・専門研修と同一年度内に実施する場合には、受講者や事業所の負担が大きいことが指摘された。また、実際にピアサポーターとして雇用・活動した後に受講することで、学びが深まるとの意見もみられた。したがって、フォローアップ研修については、単なる研修課程の一部としてではなく、実践経験を振り返り、継続的な学びを支える仕組みとして再検討する必要がある。

以上より、障害者ピアサポート研修の質向上には、カリキュラム内容の見直しに加えて、講師・ファシリテーターの育成、合理的配慮の標準化、演習運営を支える教材・ツールの整備、フィードバックを次年度研修に反映する仕組みづくりが重要である。特に、多様な障害特性に対応した研修として実施するためには、多様な障害特性に応じた説明方法、資料作成、時間配分、支援体制の整備が不可欠

である。また、障害者ピアサポート研修は、知識や技術の習得のみならず、受講者同士の相互理解や関係形成を通じて学びを深める特徴を有しており、講師・ファシリテーターには、こうした学習環境を支える役割が求められる。

## E. 結論

本研究により、障害者ピアサポート研修における講師・ファシリテーターは、受講者同士が安心して支え合える場づくりや、障害特性に応じた理解促進、合理的配慮の実装に重要な役割を担っていることが明らかとなった。一方で、内容重複、演習運営、障害横断的配慮、ファシリテーター育成等に関する課題も示された。今後は、講師・ファシリテーターの継続的育成と、障害特性に応じた柔軟な研修運営体制の整備が求められる。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

### 1. 特許取得

なし

### 2. 学会発表

- 1) 一木崇弘，小笠原啓人，彼谷哲志，桐原尚之，栄セツ子，中田健士，矢部滋也，山口創生，三宅美智，宮本有紀，岩崎香．障害者ピアサポート研修の実施状況と制度的課題の全国調査．日本精神障害者リハビリテーション学会 第33回大会，札幌，2025年10月25日．

## H. 知的財産権の出願・登録状況

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし

## 文献

岩崎香，秋山剛，山口創生，他：障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修の構築．日本精神科病院協会雑誌 36:990-995，2017

岩崎香（研究代表者）．障害者ピアサポートの専門性を高めるための研修に係る講師を担える人材の養成及び普及のための研究．平成30年度厚生

労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）  
総括・分担報告書，2019

岩崎香（研究代表者）．障害者ピアサポート研修  
の実施内容の検証及び更なる効果的な実施方法の  
確立に向けた研究. 令和6年度厚生労働科学  
研究費補助金（障害者政策総合研究事業）総括・分  
担報告書，2024

図 1. 回答者の障害等領域（複数回答，n=212）

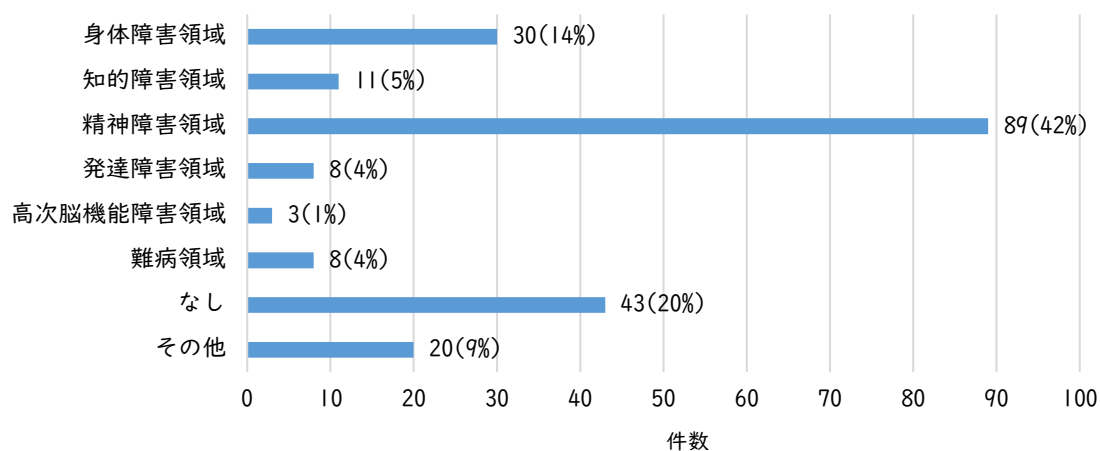


図 2. 基盤的環境整備として重要な項目（上位 10 項目，複数回答）

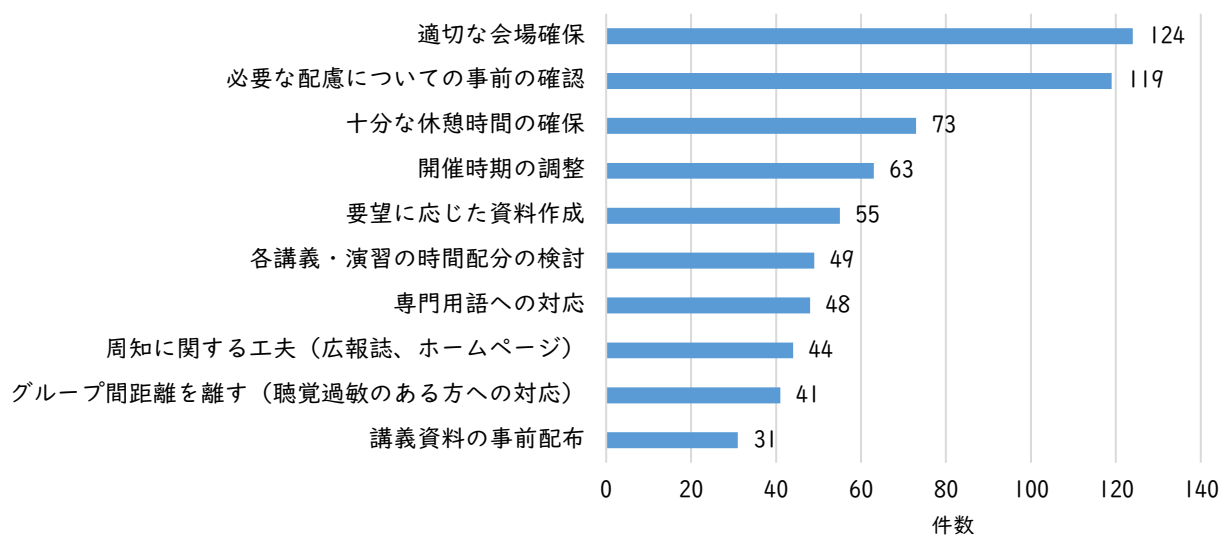


図 3. 合理的配慮として重要な項目（上位 10 項目，複数回答）

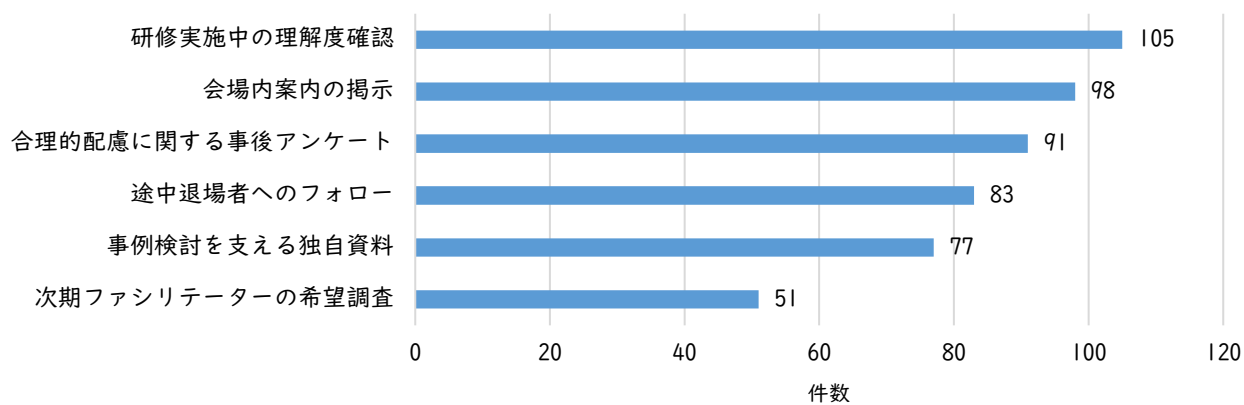


図4. 演習を円滑に進めるための工夫（複数回答，n=171）

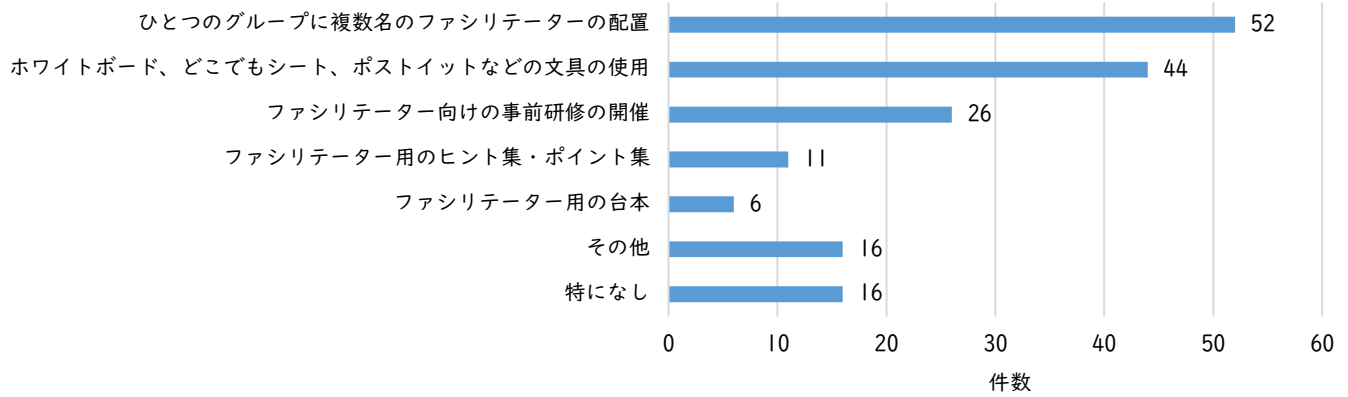


図5. 基礎研修で最も重視した点（n=166）

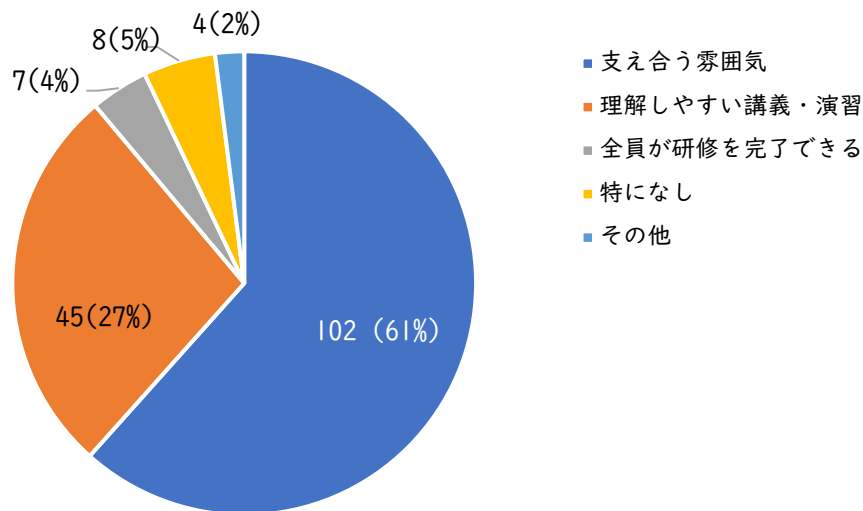


図6. 専門研修で最も重視した点（n=127）

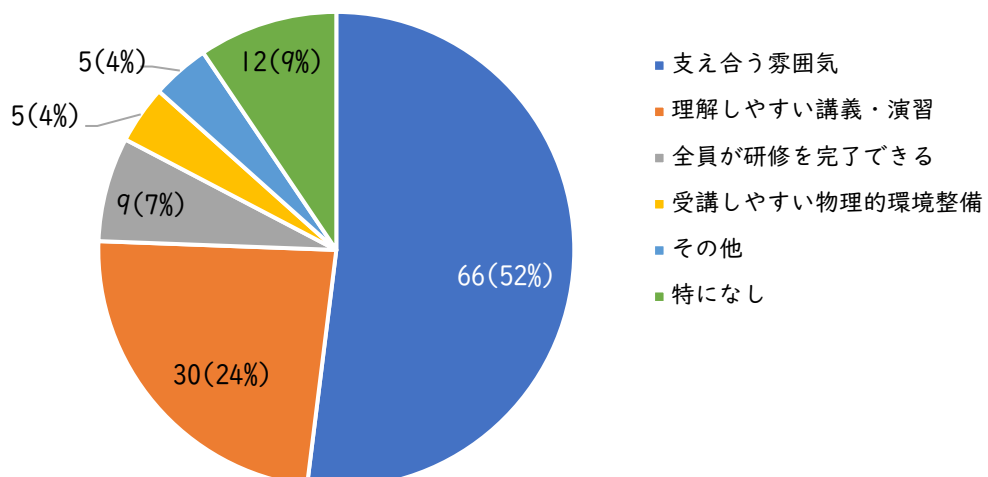


図7. フォローアップ研修で参加経験のある科目（複数回答，n=129）

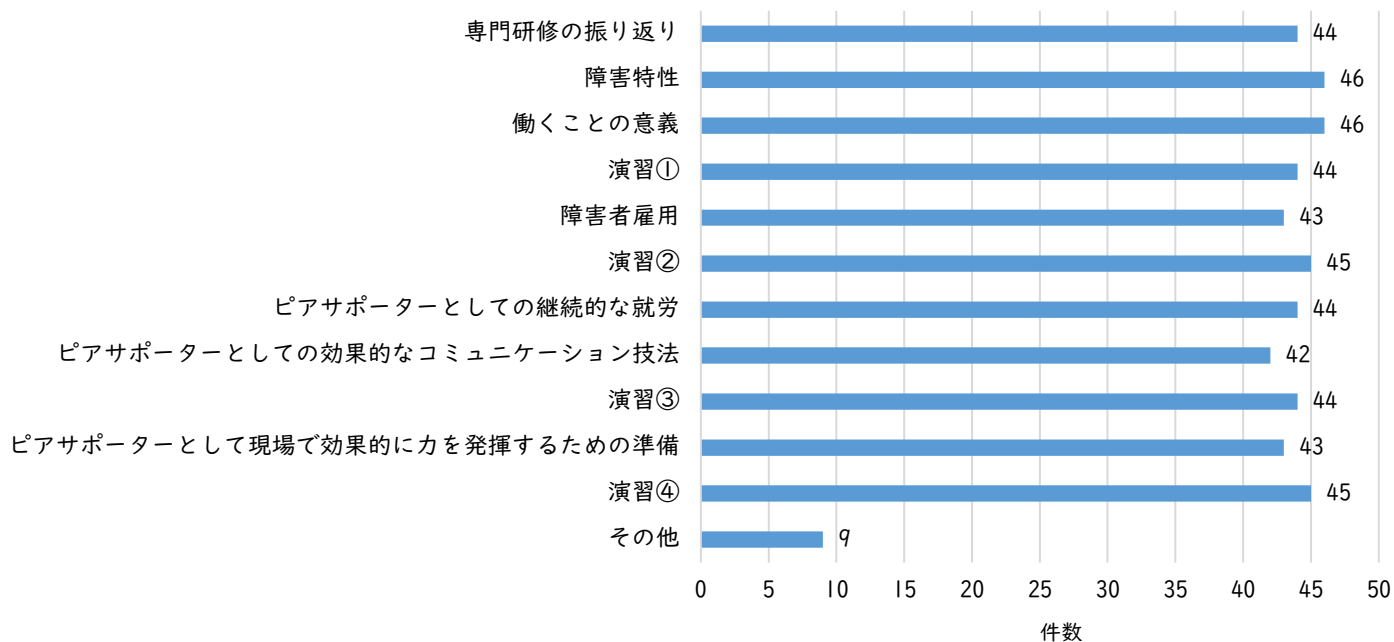


図8. フィードバックの内容（複数回答，n=77）

